鶴まき田

中里のつるの恩がえし

昭和五十七年一月一日号

「つるまきだ」という田んぼが、中里字佐八(なかざとあざさはち)八幡宮の南の方にあります。

鶴が種をまいたという言い伝えから名づけられました。

昔は、人間と動物が仲よく暮らしていました。これもその一つ、人と鶴とのこころあたたまる話です。

中里の字佐八八幡宮

中里の宇佐八幡宮の境内には、大きな松の木があって、鶴の親子が住んでいました。

ある日のこと、一羽のひなが巣から落ちてしまいました。さあ大変、親の鶴は悲しそうになきながら、ひなのまわりを飛びまわりますが、どうすることもできません。

そこへ通りかかったおじいさんがこれを見て、ひなを巣へかえしてやりました。大きな木に登るには、とても苦労しました。

次の年、村は大ききんになり、食べるものがなくて、ついに大切な種もみまで食べてしまったのです。

翌春、米を作ることが出来なくて村人が困っていると、二羽の鶴が飛んで来て、何と田んぼに種をまいてくれたのです。

鶴がまいた稲が実って、村人は救われました。

それからというもの、村人はいつまでも鶴を大切にしたということです。

それはみごとな松だった

山田芳太郎さん（中里四）

その松は樹齢千年のみごとな松だった。何しろ東海道一というだけあって、枝先は神社前の道を越えて、田んぼまで届いていたほどだよ。

でも、ついに枯れて確か昭和十年に切り倒したのさ。職人が四・五日かかったのを今でも憶えているよ。

昔はこのあたりには、どじょうが多くいたので鶴が巣をつくりに来たんだろうよ。